

新入短大生の職業意識と専門選択の動機に関する研究 — 第一看護科，介護福祉科，医療保育科の比較を通して —

小河 晶子，樟本 千里，岡田 恵子
鎌野 智里

A Study on the Professional Consciousness and the Motive of Occupation Career Selection in the New Students

Akiko OGAWA, Chisato KUSUMOTO, Keiko OKADA,
and Chisato KAMANO

キーワード：職業意識，専門選択，看護，介護福祉，医療保育

概 要

本研究は新学科である医療保育科の学生の実態を明らかにすることを目的とし，共通点の多い第一看護科，介護福祉科，医療保育科の3学科の女子新入学生を対象に，職業意識および専門選択の動機について比較調査を行った。医療保育科は3学科中，職業意識が最も高かった。次に専門選択タイプが自己実現限定型，自己実現情報駆使型，および自己実現低迷型の3タイプに分類し，上記3学科の学生について検討した。専門選択タイプによる学科別の職業意識に関して，第一看護科において職業意識の高い学生は自己実現限定型および自己実現情報駆使型が高かった。介護福祉科は自己実現限定型が他の2つの型より高かった。医療保育科においては，職業意識の高い学生は自己実現情報駆使型が他の2型より高かった。職業意識を維持し，就職後も職業を継続していくことのできる医療保育士を養成していくためには理論に基づいた実践力があり，保育士の専門性の自覚をもった学生の養成が必要となるであろう。

1. 緒 言

本学では本年，新たに医療保育科が加わり，対人援助を専門とする養成課程が第一看護科，介護福祉科，医療保育科の3学科となった。これら3学科では，入学時に既に専門選択が行われていること，専門性が高く，卒業後国家資格を取得することが可能であること，専門が特定の職業と結びついていること，職場での女性進出度合いが高いこと，対人援助を専門とすることなど多くの共通点を有している。さらに，看護科のように特定の職業と結びつきやすい専門分野の学生は，文学，語学など人文系分野の学生に比べ，職業意識が高いといわれている¹⁾。したがって，介護福祉科および医療保育科の学生もそれぞれ介護福祉士，保育士と特定の職業と結びついているため，職業意識が高いことが予測される。しかし，医療保育科は全国でもはじめての学科であるため，学生の職業意識について定か

はない。

一方，非常に共通点の多い3学科であるが，最終的にそれぞれの専門を決定するにあたっては何か大きく影響を受けた事柄，すなわち動機となった事柄が存在したと考えられる。看護師の専門選択に関する研究は，河村ら²⁾など数多くなされている。しかしながら，介護福祉士の専門選択に関する研究は数少ない（例えば鈴木ら³⁾）。さらに医療保育士に至ってはみあたらない。

そこで本研究では，医療保育科の学生の実態を把握する目的で，入学当初の職業意識および専門選択の動機について，共通点の多い第一看護科，介護福祉科との3学科間で比較調査を行うことにした。新入生の実態を明らかにすることは今後の指導・教育を行う上で，有用な資料となりうると考える。

2. 研究方法

1) 対象および調査方法

(1) 対象：本学の第一看護科，介護福祉科，および医療保育科に，平成17年度に入学した女子学生である。

(平成17年10月3日受理)

川崎医療短期大学 医療保育科
Department of Nursing Childcare

調査人数は、第一看護科が81名、介護福祉科が56名、医療保育科が70名の計207名であった。なお、平成17年度に本学の第一看護科に入学した中国からの留学生(2名)については、本調査の対象外とした。さらに、専門選択動機の質問項目で1項目でも回答のなかった対象者のデータは分析から除外した。その結果調査人数は、第一看護科78名、介護福祉科56名、医療保育科67名となった。

(2) 調査期間：平成17年6月15日～6月21日に実施した。

(3) 方法：質問紙調査法を採用し、授業終了後の時間を利用して、集団調査を学科単位に実施した。各学科で研究者が研究主旨を説明し、調査票を配布した後、自己記入を求め、回収した。アンケートの回収率は3学科とも100%であった。

2) 調査内容：質問紙は職業意識に関する項目、専門選択にあたって影響を受けた事柄に関する項目、およびフェイス項目で構成した。

(1) 職業意識：日本労働研究機構による HRM (Human resource management) チェックリストから、「キャリア・コミットメント」(career commitment: CC)チェックリストを用いた³⁾。このチェックリストは自分の専門分野や職業キャリアに対する関心や思い入れの強さをみる尺度である。質問項目は8項目あり、

「Yes」(5点)から「No」(1点)の5段階で評価を求めた。なお、逆転項目は得点化の方向を逆にし、「No」を5点、「Yes」を1点とした。

本研究では専門の異なる3学科の対象者の職業意識について得点化することができるため、この尺度を採用した。

(2) 専門選択の動機：まず、予備調査として、対象とする3学科の女子学生に「あなたが現在の専門を選ぶにあたって影響を受けたこと、受けた人」について複数回答を認めた自由記述方式で行い、回収した。次に、記述された項目全てを列挙した。全部で回答数は504であった。次に全項目を類似項目に分類した結果、24カテゴリーとなった。さらに、それらの項目を3学科で共通に回答することができるように一般化した質問内容にし、最終的に「専門選択の動機」に関する質問項目とした。選択できる回答は「非常にあてはまる」、「あてはまる」、「どちらともいえない」、「あてはまらない」、「全くあてはまらない」の5段階で、それぞれの回答を5～1点と得点化した。

専門選択の動機に関する因子構造を明らかにするため重相関係数の二乗を用いた因子分析を行った(バリマックス回転)。固有値と解釈のしやすさを考慮し3因子を抽出し、回転後の因子負荷量が.40以上を示した項目を尺度得点の算出として使用し、再度因子分析を行

表1 専門選択の動機に関する因子分析の結果

No	項目内容	因子I	因子II	因子III
21	専門領域に関する興味があった	.71	.07	.09
13	やりがいのある仕事に就きたい	.58	.00	.11
23	好きなことを仕事にしたい	.56	-.09	.08
12	専門とする対象者への興味があった	.56	.22	.04
5	人を援助したい、役に立ちたいという思いがあった	.55	-.05	.06
7	幼いころからの夢だった	.49	.20	-.08
6	なんとなく選んだ#	-.64	.06	.15
24	第一希望の専門には入れなかった#	-.45	.09	.13
15	先生から勧められた	-.05	.60	.07
11	友人先輩から勧められた	-.10	.55	.00
18	大学名に魅力を感じた	.10	.50	.05
14	著名人にあこがれた	-.01	.50	.00
16	インターネットで情報を得た	.11	.49	.05
19	新聞、テレビ、映画などを見た	.23	.41	.06
2	専門にかかわる書籍を読んだ	.23	.41	.08
8	家族や親戚の職業が関連領域であった	-.02	.00	.68
17	専門とする対象者の存在が身の回りにあった	.09	.02	.60
3	親の職業が関連領域であった	.07	.04	.52
22	家族、親戚から勧められた	-.03	.34	.46
寄与率 (%)		14.5	10.4	7.4
α係数		.77	.69	.67

#は逆転項目

った結果が、表1である。その結果、因子Iが8項目、因子IIが7項目、因子IIIが4項目の計19項目を選出し、いずれの因子負荷量も.40に達していない項目、すなわち、項目1, 4, 9, 10, 20の5項目は除外した。

まず、因子Iをみると、項目7「幼いころからの夢だった」、項目13「やりがいがある仕事に就きたい」や項目23「好きなことを仕事にしたい」など自己実現および内的動機に強く影響を受けて選択を行っていることから、この因子を「自己実現因子」とした。

次に、因子IIは、項目19「新聞、テレビ、映画などをみた」、項目2「専門にかかわる書籍を読んだ」、項目11「先生から勧められた」など他からの情報に強く影響を受けて選択を行っていることからこの因子を「情報因子」とした。

因子IIIをみると、項目3「親の職業が関連領域であった」、項目8「家族(兄弟姉妹、祖父母)や親戚の職業が関連領域であった」など家族・親戚に影響を受けていることからこの因子を「家族・親戚因子」とした。

因子ごとに質問項目の得点を合計平均し、自己実現得点、情報得点、家族・親戚得点とした (range=1-5)。尺度の内的一貫性を確認するために、各因子に関してクローンバックの α 係数を算出した。その結果、 α 係数は「自己実現」では.77、「情報」では.69、「家族・親戚」では.67であった。

(3) フェイス項目：①学科、②年齢、③本学卒業後、資格に関連した職業に直ちに就職する予定か否か、④高等学校時代の文系理系の別、⑤現在の専門を選択していなければどんな専門を選択していたかを調査した。

(4) 倫理的配慮：調査への参加については自由意志であり、調査結果は統計的に処理し、機密保持のために厳重に保管・管理することを文書にて伝え、調査を依頼した。

(5) 分析方法：集計・分析はエクセル2000, Statcelおよび STATISTICA'98 Edition を用いた。

3. 結 果

1) 職業意識

3学科の職業意識得点の平均値および標準偏差を図1に示した。

分散分析の結果、条件の効果は有意であった ($F(2,199)=18.419, p<.001$)。Scheffe法を用いた多重比較によれば、医療保育科は第一看護科および介護福祉科との間に有意差があった ($p<.001$)。しかしながら、第一看護科と介護福祉科の間の差は有意でなか

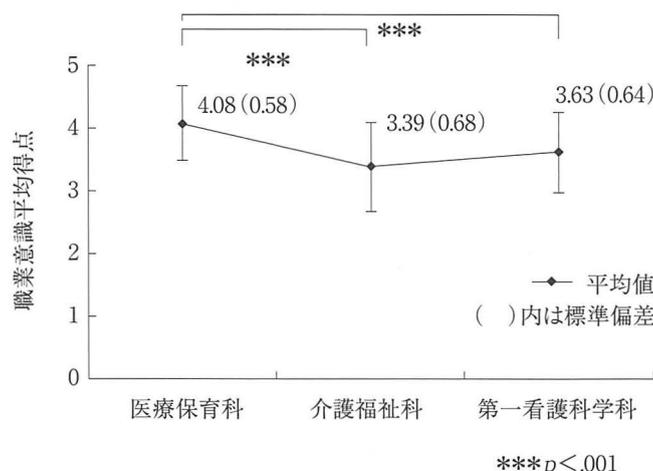


図1 3学科における職業意識の平均得点および標準偏差

表2 職業意識と専門選択の動機との相関関係

	職業意識	自己実現	情報	家族・親戚
職業意識				
自己実現	.61			
情報	.07	.23		
家族・親戚	.05	.09	.20	

った。

2) 職業意識と専門選択の動機の相関関係

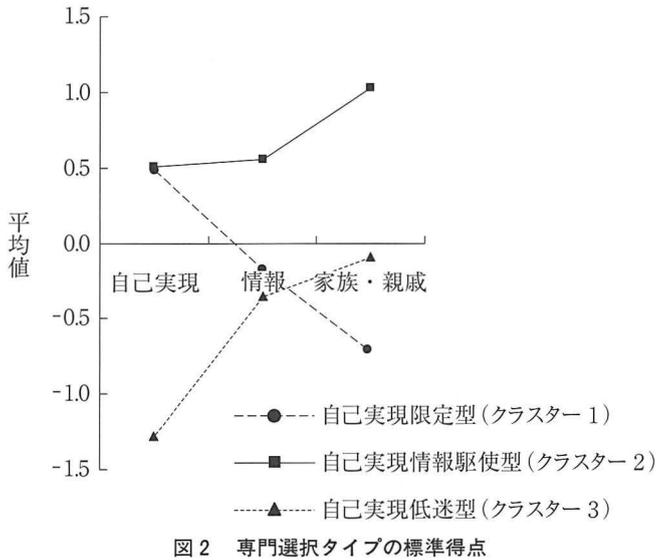
職業意識と専門選択の動機との関係を検討するために相関係数を算出した (表2)。

その結果、職業意識得点は自己実現得点と比較的強い正の相関関係がある一方で、情報因子得点、家族・親戚因子得点とは相関関係がみられなかった。したがって、職業意識の高さは自己実現の達成を動機としていいることと関連していることが示唆された。なお、専門選択の動機の3つの因子得点、すなわち、自己実現得点、情報得点、家族・親戚得点間には相関関係がみられなかった。

3) 専門選択の動機に関する質問項目のクラスター分析

a. 専門選択に関するクラスター分析：専門選択について自己実現因子、情報因子、家族・親戚因子の3つの側面から被験者の分類を行った。その方法としては、自己実現因子得点、情報因子得点、家族・親戚因子得点の標準化を行い、これをデータとして、K-means法によるクラスター分析を行った。その結果、3つの因子得点の差異に特徴付けられる3つのクラスターが見出された。各クラスターの標準得点の平均値に基づいて図示したものを図2に示す。

自己実現因子得点に関して、クラスターを要因とす



る分散分析を行った結果、クラスターの主効果が有意であった ($F(2,199)=169.87, p<.01$)。LSD法を用いた多重比較の結果、クラスター1およびクラスター2は、クラスター3よりも自己実現因子得点が高くなった ($p<.01$)。次に情報因子得点についても同様の分析を行った結果、クラスターの主効果が有意であった ($F(2,199)=16.66, p<.01$)。LSD法を用いた多重比較の結果、クラスター2はクラスター1およびクラスター3よりも情報因子得点が高くなった ($p<.01$)。最後に、家族・親戚因子得点についても同様の分析を行った結果、クラスターの主効果が有意であった ($F(2,199)=117.60, p<.01$)。LSD法を用いた多重比較の結果、クラスター2はクラスター3よりも家族・親戚因子得点が高く ($p<.01$)、クラスター3はクラスター1よりも家族・親戚因子得点が高くなった ($p<.01$)。

これらの結果により、3つのクラスターは自己実現得点、情報得点と家族・親戚得点の高低によって特徴づけられていることが示された。そこで、自己実現得点、情報得点、家族・親戚得点ともに高い被験者 (クラスター2) を「自己実現情報駆使型」、自己実現得点・情報得点が低く、家族・親戚得点が高くなるが平均値を下回っている被験者 (クラスター3) を「自己実現低迷型」、自己実現得点は高いが、情報得点、家族・親戚得点ともに低い被験者 (クラスター1) を「自己実現限定型」と命名した。以後この3つのタイプを専門選択タイプと表記する。専門選択タイプのそれぞれの人数は、自己実現情報駆使型が63名、自己実現低迷型が56名、自己実現限定型が83名である。学科別に専

表3 各学科における専門選択タイプの人数と割合

	自己実現限定型	自己実現情報駆使型	自己実現低迷型
看護	29 (36.7)	27 (34.2)	23 (29.1)
介護	23 (41.1)	13 (23.2)	20 (35.7)
保育	31 (46.3)	23 (34.3)	13 (19.4)

() 内は%

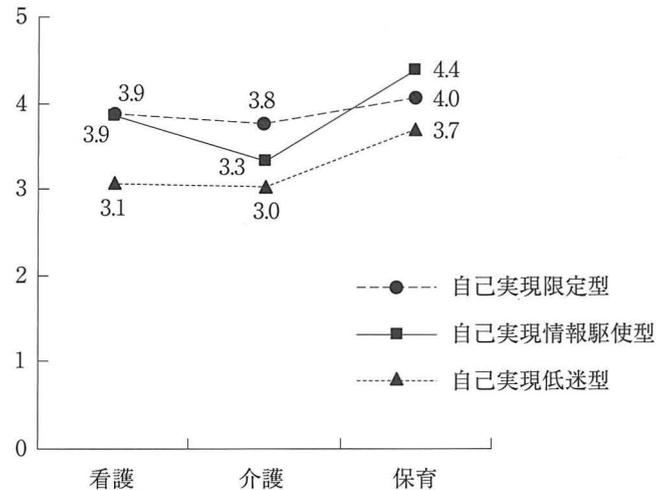


図3 各学科における専門選択タイプの職業意識平均得点

門選択タイプの人数を集計したものが表3である。専門選択タイプの学科による特徴を検討するために χ^2 検定を行った結果、人数に偏りはなかった ($\chi^2(4)=5.4, n.s.$)。

b. 専門選択タイプと職業意識：専門選択タイプによる学科別の職業意識の差異を検討するために、職業意識平均得点に関して学科(3)×専門選択タイプ(3)の2要因分散分析を行った。その結果、学科と専門選択タイプの交互作用が見られた ($F(4,193)=2.93, p<.05$)。図3は学科および専門選択タイプ別の職業意識平均得点を示したものである。多重比較の結果、第一看護科においては、自己実現限定型=自己実現情報駆使型>自己実現低迷型 ($p<.01$)、介護福祉科においては、自己実現限定型>自己実現情報駆使型=自己実現低迷型 ($p<.05, p<.01$)、医療保育科においては、自己実現情報駆使型>自己実現限定型=自己実現低迷型 ($p<.05, p<.01$) となった。

4. 考 察

本研究の目的は、本学において共通点の多い第一看護科、介護福祉科、医療保育科の3学科の女子新入生を対象に、職業意識および専門選択の動機について比較調査することにより、医療保育科の学生の実態を

明らかにすることであった。

本研究で明らかになったことを要約すると以下の通りである。

まず、医療保育科は3学科中、職業意識が最も高いということが示された。本研究における対象者の専門は3学科とも特定の職業と結びついており他の分野の学生と比較すると職業意識が高いと予測される。3学科のうち医療保育科の学生の職業意識が特に高かったということが本学特有のものであるのかどうかということは本研究の結果からだけでは言及できない。しかし、一因として、医療保育科がわが国初の学科であるということが影響していると考えられる。唯一であるという誇り、未知のものへの興味・関心が職業意識を高めているものと思われる。さらに、医療保育士に関して就職後の情報量は看護師および介護福祉士に比べて極端に少ないことも関与していると推測される。すなわち全国初の学科であるがゆえ、職場の実態等情報量が少なく、現実把握が難しいため、医療保育士の必要性、やりがい等の情報が先行し、職業に対して強いプラスイメージを抱いている可能性がある。

次に専門選択タイプが3タイプに分類された。自己実現限定型と自己実現情報駆使型の共通点はどちらも専門領域に関する興味あるいは専門とする対象者への興味が強い、幼い頃からの夢であった、人の役に立ちたいなど自分の願望、欲求が専門選択の動機となったタイプである。すなわち、どちらも自己実現達成動機が高いといえる。これら二者の違いは情報に影響されたかどうかである。専門選択タイプによる学科別の職業意識に関して、第一看護科の職業意識の高い学生は自己実現低迷型が、自己実現限定型および自己実現情報駆使型より低かった。したがって、第一看護科の学生で専門選択の動機が自己実現の達成であった者は専門に関する情報を取り入れてもそれに影響されず、職業意識を高く維持しているといえる。介護福祉科においては、自己実現限定型が他の2つの型より高かった。言いかえると、専門に関する情報が多く入った学生は、職業意識が低下したと考えられる。医療保育科においては、職業意識の高い学生は自己実現情報駆使型が他の2型より高かった。つまり、医療保育科の学生は専門に関する情報が多く入っても、職業意識を高く維持している。第一看護科では自己実現達成動機の高い学生が情報によって職業意識には影響を与えなかった一方で、介護福祉科と医療保育科の学生には情報が職業意識に影響を与えた。その一因として、それぞれの専

門の仕事に関する情報量の違いが考えられる。看護師は他の2職種に比較して歴史的にも古く、その仕事の内容、やりがい、難しさなどの詳細な内容の情報がかなり多く、一般の人々にも広く浸透しているといえる。そのため、専門選択時において、職業についてのプラスイメージ、マイナスイメージのどちらもある程度知識として有していたと考えられる。したがって、専門選択時に情報を多く取り入れても職業意識に影響を与えることはなかったものと思われる。一方、介護福祉科の学生と医療保育科の学生においては、職業意識に情報が影響を与えたと考えられる。介護福祉士は1987年に「社会福祉士及び介護福祉士法」にて位置づけられた職種であり、医療保育士に至ってはまだ一般への認知度は低い職種であるといえる。そのため、一般には職業についての情報が看護師ほど広く浸透しておらず、専門選択時に得られた新たな情報が職業意識に影響を与えたものと推察される。さらに、介護福祉科および医療保育科の間では情報が職業意識へ与えた影響が逆転した。一因として情報内容の違いが考えられる。例えば、介護について、マスコミなどでも介護負担、介護疲労などの情報が取り上げられ、介護福祉士をマイナスのイメージとしてとらえるような情報が数多く存在する。さらに、研究分野では年収、社会的承認、社会的評価の低さ⁴⁾や介護支援専門員の職業上のストレスの度合いの高さが指摘⁵⁾されている。このようなマイナス面の情報が入ると、自己実現達成動機が高い学生であっても職業意識を低下させてしまう可能性があるといえる。一方、医療保育士に関してはこれから資格化に向けて整備されつつある分野であり、その仕事場、および仕事の内容等は一般にあまり知られていない。情報が医療保育士の必要性、やりがい等プラスイメージに焦点が当てられ、その上、職場の実態等情報量が少なく、現実把握が難しい。結果として専門選択に関して、医療保育科の学生は介護福祉科の学生とは逆に、情報を得ても職業意識を高く維持していると思われる。

3つ目に、各科とも自己実現低迷型は職業意識が低かった。職業意識と専門選択の動機の相関関係の結果から、自己実現を動機にしている学生は職業意識が高いということが示された。したがって、自己実現達成動機を高めることで職業意識を高めることができると考えられる。看護専門学校において看護師を志した動機について調査した安藤ら⁶⁾の研究では、自己実現達成動機の強くない学生は学習への取り組みが低いという結果も示されている。類似点の多い介護福祉科および

医療保育科の学生に関しても同様の結果が推察される。学習への取り組みが低いと、成績不振から退学を招く可能性もある。したがってこのタイプ、すなわち自己実現低迷型の学生の場合、自己実現達成動機を高める必要がある。自己実現達成動機を高めるためには、自分の専門がやりがいのある職業であるということを自覚できるような指導・教育を行うことが必要となるであろう。さらに看護学生の看護師志望理由および志望の強さを調査した研究で、入学時の看護師志望度合が強いほど自己実現因子が高く、看護師を肯定的にとらえていることが報告されている¹⁾。言い換えれば、自己実現達成動機の弱い自己実現低迷タイプは専門選択に関して強い動機がないことから、自分の専門を肯定的にとらえていないと考えられる。したがって、類似点の多い介護福祉科の学生及び医療保育科の学生にも同様のことがいえるであろう。自己実現低迷タイプの学生の場合、様々な困難な事態に対して精神的に弱く、実習などストレスの多くなる場面で挫折を招くことが予測される。そのため、早期に自分の専門を学ぶための動機づけができるような指導を行い、特に実習前、実習中のフォローを充分に行うことが必要であろう。

医療保育科において、職業意識の高い学生が多かったこと、さらに専門選択の動機が自己実現動機であった学生の職業意識が高かったことから考えて、学生の多くが医療保育士を前途洋々の仕事としてとらえられている可能性がある。もしプラスイメージばかりで就職した場合、理想と現実の違いで仕事に幻滅し、離職という事態に至る可能性も考えられる。このような事態を防ぐためにも、医療保育科の学生には、医療保育士としてのやりがい等を伝えていく一方で、職場での現状、ならびに問題点も積極的に伝えていくことが重要であろう。その上で職業意識が持てるような教育が必要であると思われる。そのためには近接領域職種との違い、すなわち医療保育士としての基盤となる保育士の専門性は何なのか、母親に代わって保育することの意義は何なのか、やりがいは何なのかとということについて自ら自覚していける指導・教育が必要であると考えられる。さらに医療保育士として高い職業意識を保つためには職場で高評価を受けられることが重要な要素となるであろう。そのためには理論に裏付けられた

保育を行うことができ、現場で即戦力となる学生の養成が必要であると考えられる。

本研究では医療保育科の学生は3学科の中でも職業意識が高いことが示された。さらに職業意識の高い医療保育科の学生は自己実現の達成動機が強く、より多くの情報を取り入れて専門選択を行っていることが見い出された。職業意識を維持し、就職後も職業を継続していくことのできる医療保育士を養成していくためには、確固たる保育士の専門性の自覚をもち、理論と実践力のバランスがとれた学生の養成が不可欠と思われる。3学科に共通する自己実現達成動機の低い学生に関しては専門を学ぶ動機が獲得できるような指導および、実習に関するフォローを充分行うことが必要であろう。

5. 謝 辞

本調査にご協力いただいた第一看護科、介護福祉科、医療保育科の平成17年度入学の新入生の皆さんに深く感謝致します。また調査の円滑な実施に全面的にご協力いただいた各学科の担任をはじめ専任の先生方に心より感謝いたします。

6. 文 献

- 1) 河村彰美, 藤田淳子, 種池礼子: 看護学生の看護婦志望理由・学習進度が看護婦のアイデンティティ形成に及ぼす影響, 看護展望25(9): 105-110, 2000.
- 2) 鈴木隆男, 水田和江: 介護福祉士志望学生のIdentity得点, 倉敷市立短期大学研究紀要 35: 1-4, 2001.
- 3) 松本真作, 木下 敏, 太田さつき, 安達智子, 音山若穂, 古屋 健: 雇用管理業務支援のための尺度・チェックリストの開発—HRM (Human resource management) チェックリスト—日本労働研究機構調査研究報告書 No.124: 1999.
- 4) 秋山智久: 介護福祉士これでいいか 第22章 社会的評価を高めるための要件, 一番ヶ瀬康子監修 日本介護福祉学会編 東京: ミネルヴァ書房, pp. 193-205, 1998.
- 5) 豊嶋三枝子・須佐君子・城ヶ端初子: T県北部における介護支援専門員の職業上ストレスの実態, 日本看護福祉学会誌 8(2): 57-64, 2003.
- 6) 安藤正子, 神山とき江, 有井良江, 松土良子, 杉山和美: 看護専門学校における学生の実態調査—看護を志した動機に焦点をあてて—, 看護教育 29: 24-29, 1998.